

1 単元名 中心となる人物の気持ちを考えよう(教材文「サーカスのライオン」(東京書籍))

2 単元目標

- 物語に興味を持ち、じんざの心の動きを考えながら読み味わうことができる。 (関心・意欲・態度)
- 物語の中心となるじんざが、男の子との交流を通して変容していく様子を、叙述をもとに想像して読み取ることができる。 (読むこと)
- 言葉には、思考や感情を表す働きがあることに気付くことができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

3 基盤

教材について

本教材は、年老いて生きがいも情熱も失い、やる気なく毎日寝てばかりいたライオンのじんざが、男の子との出会いや交流を通して、失っていた生きる希望を取り戻していく物語である。場面を経るにつれ、じんざの気持ちに変化していき、男の子に心を寄せていく様子がよく表現されている。ライオンが大好きな男の子と、その男の子の気持ちに答えようとするじんざとの心の交流に児童は心を惹き付けられると考えられる。また、今までの教材と異なり、じんざの死が描かれている。火事の中、自分の命を懸けて男の子のことを助けたじんざの姿に、児童は感動を覚えるであろう。

この教材文の特徴として、じんざの気持ちの変化がじんざの言動や情景描写により表されていることが挙げられる。そのため、じんざの気持ちに変容していく過程を追いながら、場面を想像して読むことが可能となる。また、比喩、擬態語、擬音語、倒置法などの表現技法が文章の中に効果的に使用されており、児童がイメージを膨らませながら物語を読む助けになると考えられる。

児童について

本学級は男子16名、女子15名の計31名で構成されている。全体的に明るく元気で、活発なクラスである。男女ともに発言が多く、授業に積極的に参加する様子が見られる。一方、児童によっては学習への意欲や理解度に大きな差があるため、学習場面に応じて個別の支援が必要である。話すことが好きな児童が多く、朝の会のスピーチなどでは、自分の身近にあった出来事を話したり、友だちの話に興味をもって聞いたりできている。しかし、話す声が小さかったり、話を最後まで聞かず質問や発言をしたりすることが多く、話すこと・聞くことが苦手な児童もおり、友だちの話を聞いて自分の考えを深めたり、自分の考えを自分の言葉で伝え合ったりすることは、まだ十分ではない。また、本を読むことが好きな児童が多く、朝読書では自分の好きな本を選び集中して読むことができる。しかし、中には漢字の習得が不十分であったり、文章をすらすら読むことが難しかったりして物語の世界を楽しめていない児童もいる。

児童は1学期に物語文「ゆうすげ村の小さな旅館」を読んでいる。この学習では、叙述や挿絵から物語の「しかけ」を見つけ、旅館をひとりで切り盛りするつぼみさんと旅館の手伝いをするうさぎの美月の交流を楽しく読み進めることができた。また、学習後も毎週金曜日の朝読書の時間に、教科書には載っていない「ゆうすげ村の小さな旅館」の読み聞かせを続けており、季節の移り変わりとともに進んでいく作品のおもしろさを感じ取っている。

指導について

本単元では、じんざの気持ちの移り変わりを出来事の流れに沿って読み取り、話し合い、伝え合う活動によ

って学習を深めていきたい。また、音読活動を積極的に取り入れることで、文章やことばにこだわって学び合
いができるようにしていきたい。

第1次では、教材文を通読し、学習の見通しを持たせたい。教材文を5つの場面に分け、言葉の意味調べを
行い、語彙としての疑問を解決したのち、教材文を読んでふしぎに思ったところ・意味がわからなかったとこ
ろ・みんなで考えてみたいと思ったことなどを初発の感想としてまとめ、疑問点を出し合う。

第2次では、前次に子どもたちが出し合った疑問点を課題として提示しながら、各場面における登場人物の
気持ちを読み取る学習を行う。第1～4場面では心情曲線を用いてじんごの気持ちを追っていく。第5場面
ではじんごが亡くなったあとのライオン使いのおじさんや観客の気持ちを中心に考えていく。

ペア学習、グループ学習などの話し合い、伝え合う活動を積極的に取り入れていく。友だちと読みを交流・
共有し、お互いに自分の言葉で話したり相手の考えを聞いたりすることで、確かな読みの力と豊かな表現力を
育てていけるようにしたい。また、自分の言葉での伝え合いができるように、ノートを見ないで発表をするよ
うに声かけ、指導をしていきたい。

じんごと男の子の心の交流から、お互いが相手を思いやる優しさを持っていたことを感じ取ることができる
ようにしていきたい。さらには、自分の命に代えてまで男の子を助けたじんごの気持ちに迫り、気高さや命の
尊さを感じられることを願っている。

第3次では、前次までの学習をふり返り、自分の読み取ったことを表現する活動として、じんごになりき
て「ウォーッ」と叫ぶ場を設ける。同時に、じんごの「ウォーッ」という叫びにはどのような思いが込められ
ているのかを発表する場も設け、自分の考えを自分の言葉で伝えることができるように工夫していきたい。

第4次では、学校図書館との連携を積極的に図り、動物と人間の交流や心のふれあいを描いた物語に触れる
場を設ける。読書ヘルパーのブックトークを聞き、自分の読みたい本を選ぶことで、読む能力の基盤として
の選書の機会と読書量の確保を行いたい。また、心のふれあいを描いた物語を情景描写を意識して読ませるこ
とで、読書の幅を広げるだけでなく、読書をするときの観点も広げていきたい。

本時について

本時は、男の子を助けるために、じんごが猛火の中へ飛び込む場面である。児童は前時まで、男の子との
出会いがじんごを変えるきっかけになったこと、また、男の子はじんごにとって大切な友だちであることを学
習している。

「夜の散歩もしばらくはできそうにない」くらい足を痛めていたじんごが、「ごうごうとふき上げるほのお」
や「どの部屋からもうずまいて出て」いるけむりに構うことなく、男の子のいる「石がきの上のアパート」に
飛び込んだ姿を捉え、じんごにとって、男の子は自分の命よりも大切なかけがえのない存在であったことをお
さえたい。じんごの「ウォーッ」という言葉にならない叫びをあえて言葉にすることで、男の子に対するじん
ごの思いの強さに気付かせたい。学級の中には気持ちを読み取ることが苦手な児童もいるため、友だちと意見
を交流するなかで考えを深めることができるようにしていきたい。

4 指導計画・評価計画（時間扱い）

次	時	学習活動	評価規準			
			関心・意欲・態度	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと
第一 次	1	○「サーカスのライオン」という響きからイメージを膨らませる。 ○教材文を通読して、学	物語に興味をもち、進んで読もうとしている。			

		習の見通しをもつ。 ○新しい漢字の学習をする。					
	2	○場面分けをする。 ○意味が分からない言葉について、国語辞典を使って意味を調べる。					場面の移り変わりをもとに場面を分けている。
	3	○ふしぎに思ったところ・意味がわからなかったところ・みんなで考えてみたいと思ったことなどをまとめる。 ○疑問点を出し合い、課題づくりを行う。				物語を読んで疑問に思ったことや考えてみたいことなど、自分の考えをまとめている。	
第二次	4	○第1場面を読み、じんごの境遇と気持ちを読み取る。					叙述をもとに、サーカスの中にいるじんごの境遇や気持ちを読み取っている。
	5	○第2場面を読み、ライオン好きの男の子に出会ったときのじんごの気持ちを読み取る。					叙述をもとに、男の子に出会ったじんごの気持ちを読み取っている。
	6	○第3場面を読み、男の子を眠らないで待っているじんごの気持ちやそれまでのじんごの気持ちの変容を読み取る。					じんごの言葉や様子の変化から、じんごの気持ちの変容を読み取っている。
	7 (本時)	○第4場面を読み、男の子を助けるために火の中へ飛び込んだじんごの気持ちを読み取る。					じんごの行動を手がかりに、男の子に対するじんごの気持ちを想像ながら読み取っている。
	8	○第5場面を読み、じんごが亡くなったあとのライオン使いのお				↓	自分の考えをまとめている。 前場面までの出来事を手がかりに、ライオン使

		じさんや観客の気持ちを読み取っている。 ○じんごの気持ちの変化について読み取ったことをまとめる。	↓			いのおじさんや観客の気持ちを想像しながら読み取っている。
第三次	9・10	○前次までの学習を手がかりに、じんごになりきって「 ウォーツ 」と叫ぶ。	自分の読み取ったことを進んで表現しようとしている。	じんごの気持ちが伝わるように工夫している。		
第四次	11・12	○読書ヘルパーのブックトークを聞き、動物と人間の交流や心のふれあいを描いたほかの物語を読む。	動物と人間の交流や心のふれあいを描いたほかの物語に興味を持ち、進んで取り組んでいる。	ブックトークに興味を持ち、積極的に聞いている。		好きな物語を選んで読んでいく。

5 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・じんごの言動や情景描写をもとに、男の子を助けるために火の中に飛び込んだじんごの気持ちを読み取ることができる。

(2) 準備物

模造紙、挿し絵、ペン、ワークシート、紙テープ

(3) 展開 (7 / 12)

学習活動と予想される児童の反応	教師の支援と評価
1. 前時の学習をふり返り、本時の学習の内容を知る。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> じんごは、どうして力のかぎり声を出したのだろう。 </div>	
2. 本時の学習の場面 (P.71 L.6～P.74 L.5) を音読する。	<ul style="list-style-type: none"> ・個人のペースで音読を行う。 ・読み取りにくい児童のそばへ行き、一緒に音読をするようにする。 ・じんごの気持ちや様子を考えながら読むように指示をする。
3. 火事に気づいたあとのじんごの気持ち・様子を叙述に沿って考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ライオンの体がぐうんと大きくなった。」 →力がみなぎっている様子。 ・「古くなったおりをぶちこわしてまっしぐらに外へ走り出た。」 →男の子は大丈夫か心配する気持ち。とても焦っている気持ち。 ・「ひとかたまりの風になってすっとなでいく。」 →夢に出てくるじんごの様子。全速力で走っている様子。早く男の子のところへ行きたいという気持ち。 	<ul style="list-style-type: none"> ・火事に気づき、男の子の家に駆けつけ、火の中に飛び込むまでのじんごの気持ちや様子を考えさせる。
4. 火の中に飛び込んだじんごの気持ちを考える。 (1) じんごは、なぜ火の中に飛び込んだのだろうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・サーカスを見に来てほしかったから。 ・夢中だったから。 ・火の中に飛び込めるのは自分だけだと思ったから。 ・友だちを失いたくなかったから。 ・「足のいたいのもわすれて」とあるから、足の痛みよりも男の子を助きたい気持ちが強かったから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前の場面で「夜の散歩もしばらくできそうにない」くらいに足を痛めていたじんごの様子を想起させる。 ・前時の学習から、じんごにとって男の子がどういう存在だったのかを思い出させる。

(2) 「ウォーツ」と力のかぎりにほえたじんぎの気持ちを考える。

○「ウォーツ」の後に続く言葉とその根拠となる理由をワークシートに記入し、発表する。

・「ウォーツ」

- ・ あついよ。こわいよ。
- ・ 誰か助けてくれ。
- ・ 男の子は絶対に守りたい。この子がやさしくしてくれたからがんばろうと思えたんだ。
- ・ なにがなんでも助けてやる。大切な友だちだから。
- ・ 自分の命をかけてでも助けてみせる。

【理由】

- ・ サーカスを見に来てほしいから。
- ・ 毎日お見舞いに来てくれたから。
- ・ 身ぶるいをしていて、とび下りることができないから。
- ・ 自分ではどうしようもできなくて、誰かに助けてほしいかったから。
- ・ 「ウォーツ」と力のにほえて、自分たちがまだ家の中にいることを知らせたかったから。
- ・ 最後の力を振り絞って男の子を助けるため。
- ・ 男の子が優しくしてくれたおかげで、じんぎの心と体が復活したから。(第三場面の読み取りから)

4. じんぎの気持ちの変容を心情曲線で表す。

・ ワークシートに考えた言葉を記入した後、隣同士で意見を交流し合う。

・ じんぎになりきって発表するように声をかける。

・ あとに続く言葉を考えた理由についても尋ねる。

・ 炎が迫ってくる様子や煙が立ち込めている様子から、どうすることもできなくなったじんぎの状況を確認し、じんぎの心境により迫りやすくする。

評価（読むこと）

じんぎの叫びに込められている男の子に対する気持ちを、じんぎの言動や情景描写などの叙述から読み取っている。（ワークシート・発言）

・ 個人で考えて教科書に曲線を記入した後、全体で共有していく。

(4) 授業研究の視点

・ 火の中に飛び込んだじんぎの叫びについて考えたことは、ねらいに迫るのに有効であったか。